

## 「協同組合地域産業基盤」研究会 打ち合せ会の報告

1991年11月16日(土) 14:00 協同総合研究所

イタリアを始め海外諸国のいわゆる協同組合セクター論なるものが伝えられたことは、わが協同総合研究所設立の気運をも招いた程の、わが国の協同組合運動においていわば一つの重要な史的契機であったと言ってよい。その国際的な諸潮流の内容をこれからも追究する取材や分析の活動も重要であるが、問題はわが国のいわば日本の現実の中で協同組合セクターと呼び得る程の、経済と産業との実質的内容をどのように創り出して行けるかの調査や討究が、全くと言ってよい程に進んでいないことを埋めて行く活動の必要性、これこそがわが協同総研のメンバーにおいて切実に自覚されなければならない。

このような思いを前提にして理事会ないし常任理事会の確認にもとづき、「今後の研究会の構想に関して」の「運営事務局からの提案」が、安藤政武常任理事から取り敢えず次の5項目にわたって提起された。すなわち第1に《生活》《文化》《産業》《労働》における新たな《協同》の芽ばえを、全国各地の実践の中に見出すべく情報交流の場をつくろう。第2にこの新たな《協同》が、《生活》《文化》《産業》《労働》を結ぶ地域ごとの基盤的な構造における、どのような内発的発展性との関連に根拠をもつのかを、全国各地の一つ一つの実践例において見定めるべく視察や見学の機会をもとう。

第3に《農協》《漁協》《森協》《生協》《中企協》など既存の協同組合と、《生産》《流通》《消費》《再生》の、《生活》と《産業》の循環における《協同組合間協同》のネットワークづくりが、地域のおよび全国的にどのように展望し得るかを語り合うべく実践的討究の輪を積み重ねよう。第4に地域ごとの《生活》《文化》《産業》《労働》を結ぶ全国的な動向を解き明かすために、財界や関連業界、中央省庁や地方自治体、政党や運動団体など

における政策や計画や要求の調査分析に当らう。第5にいわゆる協同組合セクター論が、わが国の現実的基盤において実践的にどのような意味をもち得るかを実践的に確認し合うために、諸外国の理論や実状との対比において、わが国における主体的な状況と客観的な条件とについて研究検討を進めよう。

菅野正純専務理事を含む当日の参加者の討議を経て、さし当り次の諸点についての基礎的な学習交流から開始することにした。第1に海外諸国におけるいわゆる協同組合セクター論の動向とその基盤たる各国の状況について、第2にわが国におけるいわゆる協同組合セクター論をめぐる諸見解とその実践的な問題状況についての学習。そして第3に協同組合間協同の実践的な展開が、全国各地の具体的な状況としてどのように確認し得るかについての交流を。第4に協同組合や協同を旨とする全国的な諸団体の、協同組合間協同や新たな協同の支援についての政策的展望についての討究を。かくて国民生活の向上と日本経済の民主化のために、産業や労働や福祉や文化の面で《協同》のシステムがどのような役割を担うべきかの、実践的かつ理論的な研究に取り組もう、と。

当日の参加者のうち小沢孝雄氏は狭義の農協だけでなく、広い視野に立った地場産業の発展を生み出す協同の組織論を、外谷富二男氏は中小企業労働運動の現場から労働者協同組合の事業と運動への志向を、野中郁江氏は会計学や経営分析の方法を以て協同組合の研究を、広瀬謙一氏は重工業中心から生活中心・環境保護の産業構造を市民の側からつくって行く担い手としての協同をとそれぞれ問題意識として示されたが、これからその内容を例会で報告し合うと共に、この「協同の発見」にも発表して行くことを申し合せた。

(文責・安藤政武)

報告・文責 辻 卓 男 (辻情報サービス)

## 「ソフトウェア産業の労働のあり方と協同化への道」

## 報告概要

## 1. ソフトウェア産業の実態

「産業として自立していない」という視点から分析。それは、価格形成のあり方や、ソフトウェアの商品としての流通の難しさや、ソフトウェア産業の成立が、そもそも「労務提供を目的として成立してきた」経過などからみて言える。

## 2. ソフトウェア産業の労働組合

電算労コンピュータ関連労働組合（略称コンピュータユニオン）の運動を紹介する。その中で、労働者供給事業が果たしている役割と意義について。中小零細ソフト会社を中心に、3割が派遣労働という中で、「中間マージン（搾取）の実態が本人に分かりやすい」（会社の管理がいい加減なこともあり）ので、「中間マージンのない労働者供給事業に参加するのは、ソフト労働者の自然の選択」として労供事業が発展してきている。それが、今後ますますソフト業界の賃金の底上げの役割を果たしていくだろうと考えられる。さらに労働者の自立の意識を育てているといえる。一例に、労供事業に参加した技術者が、派遣先のコンピュータ販社が業績不振でそのソフト部門をなくすという事態に遭遇したとき、そこの社員がいくところがなくなり困っていたのを見て、労供を紹介しながら、「会社に属していても決して安心ではない」と思ったという。そこには企業から自立して労働組合に依拠して生活するほうが安心だという遠慮した気持ちが感じられる。

## 3. 新しい協同の試み

しかし、派遣で仕事の引き合いが多いのは20～30歳代が中心で40歳代になると「なかなか派遣の仕事はない」。というのは、「派遣先のリーダーなどが、自分より年長であることから使いにくい」という傾向が見られるからだ。また、「結婚・子

育て」で派遣に出られなくなった、「それでも仕事を続けたい」という女性のソフト技術者もいる。それらに対処するため、派遣でない仕事のやり方として、「請負」（完成に責任を負い、時間管理でない仕事のやり方）の手段を研究してきている。そこから協同組合方式がふさわしいという結論がでている。どのような形式の協同組合かということ、今の法的枠内で考えて、一人一人が個人事業主で参加する事業協同組合という方向である。それは仕事を取ってくる形態が様々で、個人が直接取る場合もあるし、協同組合が窓口になることもあるということを考えての選択である。また、ソフトの仕事の進め方がプロジェクト方式であるということにも対応している（個人事業主のプロジェクト毎の離合集散を前提とするという点で）。一方、一人一人のソフト技術者の「労働者性」（「他人を搾取して、自らは労働しない」というようには決してならないという立場を堅持するという意味での）を維持していくために、コンピュータユニオンの労働組合員である（なければならない）ことを同時に保証していくという。

## 4. 労働組合とは何か（討議に触発されて）

労働組合を企業の枠内で、企業と対じ、あるいは補完するものというように考えてしまえば、労働組合としての活動領域はかなり限定されてしまう。しかし労働組合法は、「この法律で『労働組合』とは、労働者が主体となって自主的に労働条件の維持改善その他経済的地位の向上を図ることを主たる目的として組織する団体」（2条）といているように、労働組合が社会的に認知された法人として、労働者の労働条件、経済的地位の向上を図るため自主的に、仕事を興したり、就職を斡旋したり、労働者を派遣したりという活動を積極的に支援し、自らも行うことは法的精神からいっても妥当なことではないだろうか。

## 第6回基本研究会のお知らせ

報告：石見尚（日本ルネッサンス研究所）

「日本の協同組合運動の新しい波」

日時：1992年1月18日（土） 15：00～17：30

会場：明治大学／神田駿河台校舎／研究棟4階会議室（御茶ノ水駅下車、徒歩5分、大学正門入り、左奥の白い建物、正門の守衛さんにたずねてください）

月例の基本研究会は、第二部の〈運動の実践〉編に入っています。今回は、⑤の「日本の協同運動」、⑥の「協同組合セクターと地域づくりネットワーク」のテーマを中心とした報告です。また第一部の〈運動の社会的背景〉の④「協同思想史の現段階」にも関わる報告でもあります

石見さんは、都市部のワーカーズ・コレクティブなどの生活者運動や広く市民社会運動との関わりを持たれ、農業、林業分野の協同組合運動との交流をも続けられています。また協同組合思想史の分野でも研究をすすめられながら、「協同組合の世代論」として過去の協同組合の歩んだ道と理論を整理し、現代における協同組合理論の枠組みをつくりあげようとされています。

当日は新春の基本研究会にふさわしく、日本の労働者生産協同組合運動の現段階と協同組合運動全体の中での位置づけ、展望を示していただく報告となるでしょう。皆さまのご参加と活発な討議を楽しみにしています。

参考文献としては、以下のものがあります。

- 『協同社会の復権』（編著）日本経済評論社、1985年
- 『日本のワーカーズ・コレクティブ』（編著）学陽書房、1986年
- 『いま生活市民派からの提言』（編著）御茶の水書房、1988年
- 『第三世代の協同組合論』論創社、1988年
- 『職—そして夢』（訳書）批評社、1984年

## 各研究会の今後の日程

＝第1回「協同組合地域産業基盤」研究会＝

・前回の打ち合わせ会では、①協同組合セクター論、②内発的発展論、③協同組合事業経営の特質、といった論点を整理、究明する必要があるとの方向が出されました。これを深めるために、まず以下の関連書の合評会を行ないます。

・鶴見和子他編『内発的発展論』（東大出版会）、生活ジャーナル編『ひろがる協同の息吹』（生活ジャーナル）、プランディーニ・菅野正純訳『協同組合論』（芽ばえ社）

・書評報告：安藤政武（日本生協連）

・1992年1月14日（火） 18：00

・協同総合研究所（JR高田馬場駅、新宿寄り改札を出て30m）

＝第6回「福祉・医療と協同」研究会＝

・報告：松本迪子（柳原病院家事援助者）

「柳原病院から地域に広がる家事援助事業の取り組み」

・1992年1月24日（金） 18：30

・足立区／柳原病院会議室

（足立区柳原1-22-5 北千住下車徒歩10分、京成関屋下車徒歩3分）

＝第7回「福祉・医療と協同」研究会＝

・報告：木下安子（白梅女子短大）

「福祉ヘルパーの労働と教育研修のあり方」

・1992年2月21日（金） 18：30

・協同総合研究所（JR高田馬場駅、新宿寄り改札を出て30m）

＝第1回「労働者協同組合法制」研究会＝

・報告：菅野正純（協同総合研究所）

「イタリアにおける労働者協同組合法制」

・1992年1月25日（土） 13：00

・協同総合研究所（JR高田馬場駅、新宿寄り改札を出て30m）